

書評「ガンの真相と終焉」

日本人の2人に1人がガンにかかり、3人に1人がガンで死亡していると云われている。厚生労働省発表のデータによると、日本人の死因の第1位は、戦後の1950年までは結核、以降、1980年までは脳血管疾患、以降は今日までの約40年間、悪性新生物（ガン）となっている。

幸いにして、私とガンとの”縁“は、100歳まで生きると公言し、93歳の誕生日の少し前に天寿を全うした明治生れの父の死因が、ガンであったことだけである。

この度、知己の大脇準一郎氏から、「今こそ知るべき「ガンの真相と終焉」」（医学博士小林常雄著）という書籍を紹介された。

本書に記載の著者略歴によると、小林先生は、昭和44年に鳥取大学医学部卒業後に、国立がんセンターに内地留学し、京都大学及び東京大学の大学院で、ガンの基礎研究を行い、東京大学で博士号を取得とある。

その後の経歴は、京北病院院長や国際がん予知予防センター長などの要職を務めたとあるが、特に目を引く業績として、「腫瘍マーカー総合診断法による癌の危険度判定」が、癌専門誌「Cancer」誌により広く評価され、このことを知った、第40代米国大統領夫人ナンシー・レーガン氏の主導により、アメリカ国立衛生研究所と全米最優秀とされるメイヨークリニックにおいて、この診断法の実証実験が行われ、その精度が証明されたことである。

本書の内容は、第1章：なぜ日本でガンは減らないのか？答えは明確です！ 第2章：TMCA検査は、ガンの予知予防に最適な検査法 第3章：ガンを減らす為に意識しなければならないことの三つの章により構成されている。

著者が本書によって強く主張する意見・考え方が、「はじめに」という頁の前の頁に記述されている。その趣旨は、日本ではガン対策は早期発見・早期治療と言われながら、実情はガンの第二予防（ガン検診を行い、ガンが見つければ、外科療法、放射線療法、化学療法による対応）しか行われていないが、第一次予防（ガンの予知と予防）を広く進めて、ガン患者を減少させるべきである、というものである。

この予知と予防のためには、著者が開発した「TMCA検査（腫瘍マーカー総合診断法）（注釈 TMCA: Tumor=腫瘍、Marker Combination Assay=検査）による診断が、精度、費用及び放射線を浴びないという安全性の面から最適である、というものである。

第2章の「ガンをいかに早期に発見できるか」の項では、TMCA検査は、①生涯、ガンになりたくない人（予知・予防目的の人） ②がん再発防止目的の人 ③治療判定したい人（現在受けている治療に迷っている人）に向いており、血液と尿の採取により、生体内の「ガン

細胞]、「ガン間質]、「ガン血管」からのマーカーを検出・解析することで、腫瘍の良性・悪性、偽陽性、悪性度、腫瘍増殖度及び自己治癒力の程度の判断ができる、と述べられている。また、「ガンの発生は、遺伝子が原因ではない」、「ガン細胞を正常細胞に戻すことができる」、「ガンに罹る3つのリスク因子が判明」ということが、耳新しい。

このことは、自分の父の死因がガンであったという自分の気掛かりを、和らげてくれた。最後に、著者のコメントで大変気になることがある。

その趣旨は、「今から27年前の1994年に、TMCA 検査の記事を専門誌 Cancer に発表し、高い評価を得た。日本の大手新聞社数社が取材に来た。しかし、様々な利害関係から、その報道が邪魔された。日本の週刊誌は、4回の捏造記事を掲載した。アメリカで高い評価を受けたこの手法が、日本では何故か無視され、妨害されている。」というものである。

私は、医療・医薬品・医療機器業界の門外漢ではあるが、このコメントを読んで、人間は利己的な動物であるので既得権益を守るという行為を容認するとしても、国民の死亡原因の第1位がガンである日本国の国民の1人として、不愉快さと腹立たしさを感じる。

私と同様に、ガンという病気に自分が罹らないだろうかという心配のある方々には、予知・予防と安心のために、ご一読をお薦めするものである。

道畑剛作 一般社団法人 日本代替医療食品研究会 常務理事,
元・防衛大学校教授・航空自衛官（空将補・戦闘機パイロット）